

## [第632回 大阪放送番組審議会議事録]

1. 開催日時 令和2年11月26日(木) 午後3時00分～4時00分

2. 開催場所 ラジオ大阪 5F 大会議室

3. 委員の出欠 委員の総数 6名

出席の総数 6名

出席委員の氏名 成瀬 國晴 河内 厚郎  
鎌田 雅子 内田 透  
たつみ 都志 (書面参加)  
萩原 章男 (書面参加)

放送事業者側出席者の氏名

吉田 禎宏 安東 義隆  
赤松 加枝子 原田 年晴  
宇佐見 健太

4. 議題

1) 番組審議 『話の目薬ミュージックソン』

2) その他

## 5. 議 事 の 概 要

議題 1) 『話の目薬ミュージックソン』について、番組の企画意図と内容を説明し、番組を聴取した後審議に入った。

## 6. 審 議 内 容

社 側 『話の目薬ミュージックソン』は毎週火曜日の夜8時から放送している番組です。視覚障害者が社会で生活する上で直面する課題を取り上げて、障害があっても、その状況を克服して、明日を元気に生きていこうというメッセージや情報、そして支援者の活動をお伝えしています。

10月6日(火)放送分は、番組休止から実に8か月ぶりの復活の回となりました。この放送では、8か月の間に新型コロナウイルスの影響で大きく変わってしまった世界で視覚障害者が受ける影響などについて考えました。ネガティブな印象が多いコロナ禍ですが、実はポジティブな面もあることを、新聞への投稿を抜粋して紹介しました。

11月3日(火)放送分は、障害者が受け取ることのできる障害年金が、新型コロナウイルス感染拡大の影響で手続きに変更が生じていることを紹介しました。

委 員 視覚障がい者にもっとも信頼できる情報源として、有益な情報を提供する番組の意義は大きいと思う。また、晴眼者に対しても、例えば「体に触れて声を掛ける」など具体的な説明をすることでサポートを呼びかけるなど、視覚障がい者と晴眼者双方に情報が提供されており、あらゆる人が生活の質を維持し高めていけるということを意識したバランス感のある番組だと感じた。

コロナ禍において、さまざまなハンディキャップを持った方が生活を維持することに苦労されていることは想像できるし、なかでも視覚障がい者は、手で触れて確認することも多く、感染リスクが高くなるため外出が難しくなっているだろうと考えてはいた。

番組で聞くと、実際には、ソーシャルディスタンスが急ごしらえの表示では確認できず、そもそも人との距離が測れないなど、漠然と考えていた以上に深刻なことが理解できた。さらに、ネットショッピングや政府による支援策など、新たな仕組みも誰かのサポートなしには活用できないこと

など、生活そのものが保ちにくいという窮状にも触れられた。  
そういった視覚障がい者が置かれている環境を理解したうえで、障害年金制度の紹介を聞くと、当事者でないと理解は難しいものの、役に立つ情報を提供するという番組目的がきちんと反映されていると感じた。  
この番組は、事実や思いを優しく伝え、みんなを公平に扱うことで社会全体の質を高めようとしているところに価値があるのだと思う。継続性を大切にしていきたい番組だと思う。

委員 ここ2、3年私も白内障が進み、今年は手術に行こうと思っていたが、コロナのせいで病院を避けている。夜の運転は自分でも怖くなったので、やめた。そのせいか、以前より感情移入がしやすかった。  
①コロナ禍の中で、視覚障害者の方がソーシャルディスタンスを取れない。②マッサージ師の収入の激減。③情報に関しては、ネットで検索することも出来ない。④ガイドさんとの「密接関係」への検証。⑤触る、匂いしか判断材料がない。以上、5つの訴えに関して、健常者にはわかりにくいことが多く、言われてみればさもありなん、といまさらながら納得した。この番組を聞くと視覚障害者の方に声を掛けたくなる。なので「ちょっと体に手を触れて『お手伝いしましょうか?』」でいい、という声かけの仕方のアドバイスは有難い。  
電話ゲストの辰巳周平さんは滑舌もよく話が分かりやすいので、つい引き込まれた。障害年金を受給申請するにあたって、初診の時に「年金を支払っていたかが、問題になる」との発言は、とても分かりやすく説得力があった。症状によって、定期的に診断を受けなければいけない、というのも私には初耳だったが、視覚障害の初心者にとっても重要な情報だったと思う。

委員 自分が視覚障害者の立場だとどう感じるのかを考えながら聴いた。視覚障害者にとってソーシャルディスタンスをとることが難しいという話を新聞の投書やパーソナリティーの西村さんの体験などを交えて話していたが、視覚障害者がつらい目に合わないために視覚障害者ができることのアドバイスはできないものかと思った。また、視覚障害者の団体に相談が寄せられているという話があったが、その相談にどのように回答しているのかを知りたくなった。こういう「困った」という事例のその先の話まで展開して行ってほしい。ラジオだからこそできる、視覚障害者をピンポイントで取り上げている番組というのは、本当に意味のある番組だと思う。これからも続けて行ってほしいと思う。

委員 自分では気づかないこと、気づきにくいことに「気づき」を与えてくれる番組だと思った。西村さんの「ソーシャルディスタンスは私には見えない」「距離を保つ足型も見えない」という言葉にハッと気づかされる思いだった。また、触ることでいろんなことを確認するのに触れない、触らなかつたらわからない、と西村さんが言っていたところは、気づけないところに実体験で気づかせてくれるというのが非常に印象に残った。

障害年金に関しては、保険制度のことなので、払うべき年金を払っていないともらえないし、いつ障害を負うことになるかわからないというのはその通りだと思った。コロナ禍で診断書免除の特例があることも視覚障害を持つ方には必要不可欠なことだし、視覚障害者に情報を届けるという番組コンセプトの使命は果たしていると思った。

ただ、あえて言うなら、視覚障害者には有益かもしれないが、一般のリスナーにはどう届いているのかと思った。特にコロナ禍にある今、共感を得られるのだろうかと思になった。また、「晴眼者」ではなく「健常者」ではいけないのかと思った。

全体的にはいい番組だが、笑いを入れるなど、もう少し工夫ができるのではと思った。

委員 緑内障が進行しているのだが、自分が障害を持って、初めて身にしみた部分が大きかった。

番組自体は、地味な番組だと思う。原田アナウンサーも自然に喋っているのが、自分はいいと思う。

年金の問題は、手続きが難しく、ラジオで一気に話されても理解するのが難しいと思う。しかし、辰巳周平さんの説明はわかりやすかった。

委員 長く続けていることが大事。原田アナウンサーの落ち着いた声がわかりやすい。

この番組の中で、実際に目の不自由な方がする言い方が一つ一つ納得できる。それがこの番組の良さである。

いわゆる晴眼者が気づかないことをちゃんと伝えて教えてくれる。現実に視覚障害者の肩に手を置いて声をかけることはなかなか難しいが、それを絶えず伝えていける番組になってほしい。

社側 貴重なご意見、ありがとうございます。

以上

7. 審議会の答申又は改善意見に対してとった措置および年月日

な し

8. 審議会の答申又は意見の概要を公表した場合におけるその公表内容・方法及び年月日

- ・「番組審議会だより」 (第632回大阪放送番組審議会議事録の要約)  
「愛してラジオ大阪」 内で放送  
放送日 令和2年 12月 23日 (水) 23時20分～23時30分
- ・「番組審議会だより」 (第632回大阪放送番組審議会議事録)  
ラジオ大阪ホームページ (<http://www.obc1314.co.jp>) に掲載
- ・ 番組審議会の議事録の原本は事務局立ち会いのもと閲覧に応じる。